

日本人初のエルサレム巡礼者 (特集 巡礼にまつわる歴史)

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2024-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 櫻井, 康人 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/2000099

特集 巡礼にまつわる歴史

日本人初のエルサレム巡礼者

櫻井 康人

- I. 『巡礼者受け入れ名簿』
- II. 大友家と岐部（木部）家の改宗
- III. ベトロ岐部の誕生
- IV. ベトロ岐部の海外での活動
- V. ベトロ岐部の帰国と殉教
- VI. ベトロ岐部の列福

I. 『巡礼者受け入れ名簿』

Navis peregrinorum という史料がある。これは、1632年にエルサレムの聖墳墓教会を管理するフランチェスコ会によって作成された「巡礼者受け入れ名簿」のことである。遡って1551年以降の名簿を編集したものであるが、その作成の背景には、言わば「厄介者の巡礼者」の排除と、受け入れるべき巡礼者の管理への志向があった。

厄介者の巡礼者の存在が大きな問題として認識され始めたのは15世紀後半以降のこととなるが、1490年に時の聖地管区長バルトロメオ・ダ・ピアチェンツァによって規程が発行された。その骨子を素描すると、次のようになる。① 巡礼宿が満員でそこ（シオン山修道院）に宿泊できなくても、修道士を罵るべきではない。② 巡礼団の引率者は、巡礼者たちを食堂に集めること（管理のため）。③ 巡礼宿には、常にムーア人・トルコ人がいて、金銭の要求・質問攻めなどの災難に遭うので注意せよ。④ 長年トルコ人は巡礼宿の中に入ってくることはなかったが、今や抑えられない。⑤ 最近、トルコ人によってフランチェスコ会の食事係が撲殺された。⑥ 従って、フランチェスコ会士は大いに苦しめられ、食事の準備ができない。⑦ そもそも、教会の維持・管理のために修道士は多忙である。⑧ 巡礼者たちは、以上のような状況に理解を示すべきである、と。

さらに、1492年、バルトロメオは巡礼者たちをシオン山修道院に宿泊させることを原則的に禁止した。その理由も素描すると、次のようになる。巡礼者たちがいると修道院が狭くなり、うるさくなる。そして彼らが無料で提供される食事をよく食べるので、その結果、修道院の財政が苦しくなる。ある修道士の言として「我々には不愉快さしか残らない。

巡礼者はこれだけの恩恵を受けながらも満足せず、表面的にしか修道士を理解せず、要求が多く、いかなる常識もなく、修道士を苦しめ、名誉を傷つけ、施しを持ち去り、修道士に対して『貪欲・無礼』と罵り、多くの恩恵を受けた後に、恩を忘れてあちこちで修道士の悪口を言う」という不満を挙げる。

以上のような結果として、聖墳墓教会は厳選した巡礼者のみを受け入れる体制になり、名簿管理がなされるようになったが、1618年4月2日の名簿には「日本のペトルス殿 (D. Petrus Japonensis)」という名前が見られる。この「日本のペトルス殿」とは、日本人初のエルサレム巡礼者として知られるペトロ岐部カスイのことである。以下、本報告では、このペトロ岐部の足跡とその背景を時系列的に辿っていきたい。

II. 大友家と岐部（木部）家の改宗

応仁の乱が起こった翌年の1468（応仁3）年、木部山城守茂美が豊後・筑後守護の大友親繁の遣使として朝鮮に渡った。このように、岐部（木部）家は大友家の家臣であったが、1501（明応10）年には、岐部弥太郎が大友親元より名字を賜り、元泰を称することとなった。両家の密接な関係は、1528（享祿2）年にも岐部能登守元泰の嫡男が、大友義鑑より偏諱を賜り、鑑泰と称するようになったことから分かる。

それから約20年後の1549（天文18）年、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に上陸した。翌1550（天文19）年にはポルトガル船が平戸に初入港し、ザビエルも平戸にて布教を開始した。そして、1551（天文20）年、ザビエルは大友義鎮（宗麟）に面謁した。この時は成果を得られず、日本人5人を伴い豊後からインドへ渡ろうとしたザビエルは、1552（天文21）年に中国南部の上川島で死去した。

1558（永祿元）年に肥前国の戦国大名の松浦隆信が、仏教勢力の要請を受けて宣教師ガスパル・ヴィレラを平戸から追放するも、翌年にヴィレラは將軍足利義輝への謁見を果たし、桶狭間の戦いの起こった1560（永祿3）年、幕府はヴィレラたちにキリスト教の布教を許可した。交易活動も活発化し、1562（永祿5）年には横瀬浦港（長崎県西海市）が開港した。そして、1563（永祿6）年、三城城主の大村純忠が受洗し、初のキリシタン大名が誕生した。同年には、ルイス・フロイスが来日し、日本での宣教活動もより本格化していった。しかし、その矢先の1565（永祿8）年、將軍足利義輝が暗殺され、ヴィレラやフロイスといった宣教師たちも京都から追放された。

しかし、織田信長が権力を握っていくことで、また流れが変わった。1569（永祿12）

年にはフロイスが織田信長に謁見し、再び京都でのキリスト教布教の許可を得た。長崎港が開港した1570（永禄13）年、日本における布教長に任命されたフランシスコ・カブラルが、大友宗麟に面謁した。この時も大友家の改宗はならずとも、信長が將軍足利義昭を破って、室町幕府が滅亡した2年後の1575（天正3）年、宗麟の次男の親家がカブラルより受洗し、洗礼名をドン・セバステイアンとした。1577（天正5）年には宗麟の家臣の武将、田原親賢の養子の親虎もカブラルより洗礼名シモンを授けられた。そして、翌年にはついに、宗麟自身もカブラルよりドン・フランシスコの洗礼名を受けた。

このことにより、九州におけるキリスト教の浸透はピークを迎えていくこととなった。1579（天正7）年にイエズス会巡察師アレックスandro・ヴァリニャーノが来日すると、大村純忠はヴァリニャーノに長崎の寄進を申し出た。翌1580（天正8）にヴァリニャーノが白杵にて宗麟を訪問した結果、白杵にイエズス会のノビシアド（修練院）が開設される運びとなった。同年に信長に謁見したヴァリニャーノは、さらにキリスト教布教のための足場を固めていった。1581（天正9）年には、府内（大分県大分市）にもコレジオ（学院）が開設された。そして、1582（天正10）年、大友宗麟・大村純忠・有馬晴信（肥前日野江藩主、純忠の甥）の名代として、天正遣欧使節が日本を出発した。しかし、同年に本能寺の変が起こり、また潮目が変わっていくこととなる。

1585（天正13）年に羽柴秀吉が関白となった年に、大友家の家臣の岐部 romano が、その一族ら144人とともに、キリスト教に改宗したのである。

III. ペトロ岐部の誕生

1587（天正15）年、秀吉は太政大臣となり豊臣の姓を賜ることとなるが、その秀吉が九州に出兵し、島津義久が降伏した後に、博多で伴天連追放令が発布された。岐部家の君主の大友義統も、秀吉の命により棄教した。このような出来事があったその年に、父 romano 岐部と母マリア波多との間に、ペトロ岐部が豊後国の国東半島の岐部に誕生した。

このような日本の情勢とは裏腹に、翌1588（天正16）年、ローマ教皇庁は府内に司教区を設置することを決議した。一方で秀吉は、長崎・茂木・浦上を直轄地とし、初代長崎代官に鍋島直茂を据えた。そして、1589（天正17）年には京都のキリスト教会を焼き討ちにした。天正遣欧使節がヴァリニャーノとともに活版印刷機を持参して長崎に戻った1590（天正18）年、秀吉が小田原城を攻めて北条氏を滅亡させ、全国統一を果たした。長崎で二十六聖人の殉教という出来事が起こった翌年の1598（慶長3）年、秀吉が死去し

た。これにより、日本におけるキリスト教への弾圧は一時収まったようである。

関ヶ原の戦いの起こった1600（慶長5）年、13歳となったペトロ岐部は長崎のセミナリオで学ぶこととなった。教師の中には天正遣欧使節の一人であったジュリアン中浦や、ディエゴ結城などがおり、ペトロ岐部の同期にはトマス次兵衛がいた。翌1601（慶長6）年には、セバスチャン木村とルイス・ニアバラの日本人初の司祭も誕生した。長崎から有馬へのセミナリオの移転に伴い、ペトロ岐部も有馬に移った。

1603（慶長8）年に徳川家康が征夷大將軍となって江戸幕府を開くと、再びキリスト教への圧力が強まっていった。1606（慶長11）年には、初のキリシタン大名であった大村純忠の長男で、肥前国大村藩主の大村喜前が棄教し、領内の伴天連を追放した。その頃に19歳となったペトロ岐部はセミナリオを最短の6年で卒業したが、修道士養成機関であるノビシアドに進むことは許可されず、司祭・修道士の補佐役である同宿^{どうじやく}となり、名を改めて「かすい」と号した。その意味については「活水」など諸説あるが、明らかとなっていないようである。そして、彼はイエズス会に私的な誓願を立てた後、宣教に従事することとなった。

しかし、その6年後となる1612（慶長17）、有馬領内でも禁教令が発布された。

IV. ペトロ岐部の海外での活動

(1) エルサレムまでの状況

仙台藩から支倉常長がヨーロッパに向けて出帆した翌年の1614（慶長19）年、全国に禁教令が敷かれた。長崎の諸教会も破壊され、マティアス七郎兵衛が斬首刑に処された。当時27歳のペトロ岐部は、マティアス七郎兵衛の遺体を長崎にて埋葬した後、追放された宣教師たちとともにマカオへ向かい、翌1615（元和元）年にマニラを経由してマカオに到着した。

当時のマニラは、1565年にフィリピン諸島を制圧し、初代フィリピン総督となっていたスペイン人のミゲル・ロペス・デ・レガスピにより1571年に占領されていた。1615年の段階では、フィリピン周辺でスペイン艦隊とオランダ艦隊が激しく戦っている状況であった。また、当時のマカオは、1557年にポルトガルが明朝より居住権を獲得しており、フランシスコ・ザビエルをはじめとする多くの宣教師たちの活動拠点でもあった。

さて、日本では明朝以外の船の入港が崎・平戸に限定された1616（元和2）年、ペトロ岐部はマカオでイエズス会への入会が正式に許可されるも、司祭への道は叶えられなかつ

た。彼は、司祭になるべくローマに向かうことを決意してまずはゴアへと向かい、翌年にゴアに到着した。そして、日本ではペトロの親族である岐部五兵衛ジョアンが豊前小倉で斬首刑に処せられた1618（元和4）年、ペトロ岐部はバグダートやダマスクスを経由してパレスチナに至り、日本人としては初めての聖地巡礼を果たした。

ゴアに降り立って陸路を取った彼の足跡はよく分っていないが、ここで彼が移動したであろう地域の状況を概観してみよう。インド南部では、1510年、スナ派イスラーム王朝であったビージャプル王国（アーディル・シャーヒー朝）から、ポルトガル王国のインド総督アフォンソ・デ・アルブケルケがゴアを奪った。そして、1534年にゴアに大司教座が設置された。ただし、ペトロが訪れた時のビージャプル王国は、イブラーヒーム・アーディル・シャー2世の下で最盛期を築いていた。また、北インドはイスラーム王朝のムガル帝国の支配下にあったが、第3代君主アクバル大帝の時に、アラビア海に面したクジャール地方を制圧し、交易拠点である港町スーラトを獲得した。その結果、ポルトガルのゴア副王との交易関係を築くこととなった。

普通に考えるとペトロもインドからパキスタン・アフガニスタン地域に入ったであろうが、そこはムガル帝国とサファヴィー朝が争いあっている地域でもあった。ムガル帝国の第4代君主ジャハーンギールは1607年にサファヴィー朝第5代シャーのアッバース1世とカンダハールを巡って争ったが、ジャハーンギールの優勢に終わり、両国間の交易関係は維持された。ジャハーンギールは、サファヴィー朝の他にもポルトガル（1580年から1640年の間は、スペイン国王がポルトガル国王を兼任）やオスマン帝国とも外交関係を持ち、イギリス東インド会社には帝国内での活動を許可した。

一方のアッバース1世も、対オスマン帝国を睨んで、オランダやイギリスと同盟関係を築いていた。特に後者に関しては、1616年にイギリス東インド会社との間に貿易協定を結び、1622年にはホルムズ島からスペイン＝ポルトガル勢力を駆逐した。ペトロが移動した頃は、第三次オスマン・サファヴィー戦争の最中であり、それが終結するのはペトロがこの地域を通過したであろう後の1618年9月26日に調停されたセラブ協定を待たねばならなかった。ただし、オスマン帝国スルタンのアフメト1世が1617年11月22日に死去した後、弟のムスタファ1世が即位するも1618年2月26日に廃位され、同日にアフメトの息子のオスマン2世が即位する、というように、この間のオスマン帝国は大規模な軍事遠征を行う余裕がなかった。ペトロのエルサレム到着が1618年4月であったことを合わせると、恐らくは戦争が休止している間にペトロはこの地域を通過することができたのであろう。

そのオスマン帝国は、1571年にレパントの海戦で敗北するも、1573年にキプロス島を獲得するなど、依然としてその勢力を保持していた。当時のオスマン帝国とヨーロッパ世界との関係を一口で言うと、ハプスブルク帝国（神聖ローマ帝国とスペイン王国）とは対立関係にあり、その他の主立った国にはカピチュレーション（アフトナーメ、最恵国待遇）を与えるなどして良好な関係を持っていた。例えば、フランスには1569年、イギリスには1579年、オランダには1613年にカピチュレーションを付与している。また、オスマン帝国とは戦争と和平・交易を繰り返すヴェネツィア共和国については、1613年から1617年の間はオーストリアと戦争状態にあったために、当時はオスマン帝国との間に休戦協定を結んでいた。

以上、総じてゴアからヨーロッパにかけて、ペトロ岐部の通過した地域は、対立関係にある諸国の入り乱れる所であったが、休戦協定が結ばれているか、戦争を一時停止している期間でもあり、その点ではペトロは幸運であったと言えよう。加えて、恐らく彼はキャラバンなどに同行する形で旅したと思われるが、その背後には国家的・政治的対立にもかかわらず、経済活動は維持されていたこともあったのであろうと考えられる。

(2) エルサレムにて

上述のように、ペトロ岐部は1618年4月2日に聖墳墓教会に受け入れられた。『巡礼者受け入れ名簿』によると、同じ日に受け入れられたのは、ペトロを含めて以下の14名となる（「殿（Dominus）」の敬称は略、★は筆者による）。

- ① フランス高等法院顧問でパリ出身の貴族ジャン・ランブルール ★
- ② マルセイユのブラシウス・アルマンド ★
- ③ マルセイユのクロード・クローゼ ★
- ④ ヴェネツィアのガスパール・ツァニネツリ ★
- ⑤ プロワのベルナール・ロション ★
- ⑥ マルセイユのジャック・ピエール・ボワツソン ★
- ⑦ マルセイユの船長エマール・ランノーダン ★
- ⑧ ガリアの聖職者ピエール・エベール
- ⑨ アルルのドミニコ会士アントワヌ・ド・クレルク
- ⑩ アムステルダム福音派ダニエル・ファン・シュテーンヴィンケル
- ⑪ 日本のペトロ

- ⑫ クロード・ピッカールド
- ⑬ ガリアのリモージュのレオナル
- ⑭ ガリアのアントワヌ

『巡礼者受け入れ名簿』では、明らかに社会的ステイタスのより高い者から順に記される慣例があった。とすると、ペトロの扱いとしては、福音派の有力者よりは下、一般のカトリック信徒より上であったと考えられよう。

さて、上のリストの中で名前の上に★が付いている者は、同日に「聖墳墓の騎士」の騎士叙任を施された者たちである。そして、恐らくは彼らはジャン・ランブルールを筆頭とする一団を形成していたものと考えられる。聖墳墓教会で騎士として叙任されるという儀礼は12世紀より見られるが、1496年に教皇庁はそれを直接の管理下に置いた。そして、『巡礼者受け入れ名簿』が作成されるのと同時に、『聖墳墓の騎士名簿』も作成されるようになった。なお、「聖墳墓の騎士」は、1949年に教皇庁の枢機卿の一人を総長とする聖墳墓騎士修道会（正式名称「エルサレムの聖なる墓の騎士修道会（Ordo Equestris Sancti Sepulcri Hierosolymitani）」）として組織化され、現在に至っている。

「聖墳墓の騎士」には実務が求められるというよりは、それになることによって得られるステイタス・シンボルが重要であった。高額の献金を要し、従って相当の裕福な者でないと「聖墳墓の騎士」になることはできなかった。「聖墳墓の騎士」たちは、儀礼を施された後に聖墳墓教会ではその証となる拍車を、その後にローマ教皇庁で剣を授かった。すなわち、概して彼らはエルサレムを訪問した後に必ずローマに向かったのである。これを考えると、ペトロはジャン・ランブルールの一団に交じって、ヴェネツィアを経由してローマまで連れて行ってもらった可能性を排除することはできないであろう。

(3) ローマから帰路へ

支倉常長が帰国した1620（元和6）年5月頃、ペトロ岐部がローマに到着した。同年10月18日に剃髪式を行った後、翌19日には守門の下級聖品を授かった。さらに、翌20日には読師の下級聖品も授かった。11月1日、かつて一時期教皇庁も置かれたことのあるサンタ・マリア・マッジョーレ教会において副助祭の聖品を授かり、11月8日には当時教皇庁の置かれていたサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ教会において助祭の聖品を授かった。その1週間後の11月15日、同教会において、ついに長年の夢であった司祭に叙階された。11月20日には改めてイエズス会への入会を正式に認められ、その翌日に

聖アンドレア修練院に入ってさらなる精進を行った。

日本では55人が処刑された元和の大殉教の起こった1622(元和8)年の3月、35歳となったペトロ岐部は、聖イグナチオ(・デ・ロヨラ)と聖フランシスコ・ザビエルの列聖式に参列するという栄誉を得ていた。6月にはローマからマドリッド経由でポルトガルに向かい、9月21日、リスボンのイエズス会修練院で2ヵ月以上の修練を行った。

イギリスが業績不振のため平戸商館を閉鎖した1623(元和9)年の3月25日、ペトロ岐部はエチオピア大司教一行とともに渡航船に乗り込み、ゴアに向けてリスボン出発した。4月3日にはマデイラ諸島のポルト・サント島に寄港し、3日後の4月6日にはカナリア諸島に到着した。7月25日に喜望峰を通過した一行は、9月にモザンビークに到着し、そこで越冬した。

では、ここで当時のヨーロッパ、および関連する範囲内でのアフリカの状況を概観しておこう。ペトロがヨーロッパに滞在していた頃のヨーロッパは、1618年5月に始まるいわゆる三十年戦争の最中にあった。1625年以降は国際紛争の様相を呈していくが、ペトロ滞在期はあくまでも神聖ローマ帝国領内のカトリック対プロテスタント(ボヘミア戦争)の段階であった。なお、ペトロ滞在中の1621年に教皇はパウルス5世からグレゴリウス15世に代替わりしているが、前者は1615年に慶長遣欧使節としての支倉常長が謁見した教皇である。

次にアフリカの状況を見ていこう。ヨーロッパを出航してまず立ち寄ったマデイラ諸島は、1420年にポルトガルの植民地とされていた。また、カナリア諸島のほうは、15世紀末にスペイン(カスティーリャ王国)によって征服されていた。周知のとおり、いずれもいわゆる大航海時代を支える拠点となった。モザンビークについても、1498年に喜望峰を越えたヴァスコ・ダ・ガマが到着して以降、1975年に独立するまでポルトガルの植民地とされ続けた。

上記のとおり、ペトロはエチオピア大司教一行と途中まで行動をともにしたが、エチオピア帝国(ソロモン朝)は、基本的にはキリスト教の一派であるコプト派国家であった。しかし、1534年にポルトガルの支援を受けてオスマン帝国勢力の侵攻を退けて以降、ポルトガルによるカトリック宣教が激しくなり、改宗した王族としなかった王族との間の対立が激化した。ペトロが乗船した当時の皇帝スセニョス1世は、カトリックであった。なお、その後のこととして、次期皇帝で息子のファシラダスはコプト派であり、カトリック勢力を駆逐するために、イスラーム勢力とも提携したのであった。

(4) 東南アジアでの潜伏

日本ではスペインとの国交が断絶され、スペインからの来航が禁止された1624（寛永元）年の4月1日、ペトロ岐部はモザンビークを出港し、5月28日にゴアに到着した。マラッカを経由してマニラに到着したのは8月頃であり、10月頃にはマカオへ渡り、日本潜入の機会を探して様々な港をあつた。しかし、事は上手く運ばないままであった1626（寛永3）年、マカオで長崎奉行の勧告に基づいて各修道会には物品と書簡の日本への送付が禁じられ、ペトロの置かれた状況はますます厳しいものとなった。

翌1627（寛永4）年2月にペトロはマカオを出発するが、シンガポール海峡でオランダの海賊船に遭遇した。陸上に逃げて2週間ほどジャングルを彷徨った後にマラッカへとたどり着くが、そこでマラリヤに罹患した。回復後、同年5月にはシャムのアユタヤへ至った。当時のタイはアユタヤ朝の時代であった。1516年には、その5年前にマラッカを押さえたポルトガルに領内の通行許可を認めた。また、1592年にはオランダにも通行許可を与えた。これらのようなヨーロッパ諸国との交易関係の構築は、必ずしも利点ばかりではないが、アユタヤ朝の成長にも一役買った。1594年から1605年にかけて戦われた、いわゆる第五次緬泰戦争では、それまで劣勢に立たされてきたビルマのタウングー朝を逆に侵攻するまでに至ったのである。ペトロが訪れた当時は、ソントム王の下で日本人町が隆盛を極めた時代でもあった。宗教政策に厳しくないアユタヤには、多くの宣教師やキリシタンも流れ着いていたのである。

ペトロも恐らくは日本人町で2年ほど過ごすも、日本行きの船に乗るにはキリシタンでないことを証明する必要があったため、船に乗ることができないままであった。さらに不運なことに、1628（寛永5）年に、スペイン船がチャオプラヤー川でシャム船および日本の朱印船を襲撃して焼き討ちする事件が起こったために、シャムにおいてキリスト教が禁止されたのである。これを受けてのことであろう、1629（寛永6）年、42歳となっていたペトロ岐部はシャムを離れ、7月2日に再びマニラに至った。

V. ペトロ岐部の帰国と殉教

1630（寛永7）年、ペトロは同じくマニラに潜伏していたミゲル松田神父と組んで日本渡航の計画を練り始めた。そして、同年の3月2日、マニラのイエズス会の支援を得て、ようやくルバング島に渡った。6月20日頃にルバング島を出発したが、彼らの乗った船が鹿児島沖の七島海峡で難破したことがかえって幸いし、商人の名義で坊津に上陸するこ

とができた。そして、7月頃にペトロは長崎に至った。

そのすぐ後に、日本は鎖国に向けての道を歩み始めることとなる。1631（寛永8）年には奉書船制度が開始され、朱印船に朱印状以外に老中の奉書が必要となった。1633（寛永10）年には第1次鎖国令が出され、奉書船以外の渡航が禁じられた。海外に5年以上居留する日本人の帰国も禁止された。キリシタンに対する迫害も激化し、イエズス会管区長代理クリストヴァン・フェレイラが、穴吊しの拷問を受けた末に棄教し、沢野忠庵を名乗るようになった。ペトロは迫害の激しくなった長崎を去り、水面下で布教活動を行いつつ東北へ向かった。詳細は後述するが、東北には後藤寿庵が福原に作った「キリシタン王国」があったためであると考えられる。

さて、鎖国およびキリシタン迫害は、その後も加速していく。1634（寛永11）年には第2次鎖国令が発せられた。管理強化のために、長崎に出島の建設が開始された。翌1635年（寛永12）年には第3次鎖国令が出され、中国やオランダなど外国船の入港も長崎のみに限定された。さらに、東南アジア方面への日本人の渡航、および同地域からの日本人の帰国が禁止された。1636（寛永13）年にも第4次鎖国令が出され、貿易に関係のないポルトガル人とその妻子（日本人との混血児含む）287人がマカオに追放され、残りのポルトガル人たちも身柄を出島に移された。

1637（寛永14）年に起こった島原の乱は、オランダが幕府に武器弾薬を提供し、反乱軍はポルトガルの支援を期待するなど、八十年戦争（オランダ独立戦争）の代理戦争の様相を呈した。翌1638（寛永15）年、島原の乱を押さえた幕府は12月、褒賞銀の制を設けて宣教師およびキリシタンの訴人を勧奨する政策に打って出た。1639（寛永15）年には第5次鎖国令が出され、ついにポルトガル船の入港が禁止された。また、ペトロが潜伏していた仙台藩でも、幕府の政策に則って領内に高札を立て、幕府の褒賞銀にさらに金子を上乗せして訴人を勧奨したのである。

では、ここで後藤寿庵と福原の「キリシタン王国」について素描しておこう。1577（天正5）年、陸奥国磐井郡藤沢城主の岩淵秀信の三男として岩淵又五郎が生まれた。兄の信時が豊臣秀吉に討たれた後、又五郎は家名を再興すべく各地を漂浪し、最終的に至った長崎でキリスト教に入信した。1597（慶長2）年、キリシタン弾圧から五島列島宇久島に逃れた彼は、そこで正式に受洗して五島寿庵を名乗ることとなった。1616（元和2）年、ヨーロッパ人の宣教師たちから西洋に関する情報を得ていた寿庵に対し、海外貿易の道を模索していた伊達政宗は、支倉常長を遣わして家臣である後藤信康の義弟となした上で、胆沢郡長沢町福原の地を下封した。しかし、その4年後、政宗は西洋との密通という幕府から

の嫌疑をはらすべくキリシタン迫害を開始した。元和の大殉教が起こった1622(元和8)年、領内のキリシタン根絶を目指した政宗は、寿庵の改宗も試みた。棄教を拒んだ寿庵は、1624(寛永元)年、福原に自身の作り上げた「キリシタン王国」を残し、陸奥国南部藩へと逃れたのであった。

いつペトロが「キリシタン王国」に到着したのかは定かではないが、1639(寛永16)年、水沢の三宅藤右衛門夫婦がペトロに宿を与えた廉で、長三郎なる者によって訴えられる。そして、ペトロも仙台領内水沢で捕縛され、江戸に送られた。

すでに棄教していた沢野忠庵(元フェレイラ神父)と対面すると、ペトロは逆に彼に信仰に戻るように薦めた。そして、同年6月、小伝馬町の牢屋敷において、穴吊るしの拷問および燃えさしの薪木の拷問を受け、ペトロは殉教した。取り調べをした井上政重は次のように書き記している。「キベヘイトロは転び申さず候。ツルシ殺され候。同宿ども勧め候ゆえ、キベを殺し申す候」と。ペトロは転ぶことなく、むしろ二人の同宿を励まし続けたので、役人たちが穴から引きずり出して殺害したのであった。

VI. ペトロ岐部の列福

時は飛んで、1963(昭和38)年、ペトロ・カスイ岐部偉徳顕彰会が、大分県国東郡国見町に設立され、1987(昭和62)年にペトロ・カスイ岐部記念聖堂が建立された。死後約3世紀半を経て、このような形でペトロ岐部は故郷に戻って来ることができたのである。すでにこの間、遠藤周作の作品などでペトロはが登場することでその存在は広く知られていくが、とりわけ地元の大分ではその足跡や精神は深く根を下ろしていき、1992(平成4)年には大分市において県民オペラ「ペトロ岐部一転び申さず候」が上演された。

2006(平成18)年より審査に入っていた教皇庁は、2008(平成20)年6月1日、教皇ベネディクトゥス16世はペトロ岐部を筆頭とする188人の殉教者の列福を承認し、同年11月24日に長崎市にて列福式が挙行されたことは記憶に新しい。

主要参考文献(二次文献については主立った邦語文献のみを挙げておくこととする)

一次史料

- ・ Calahorra, J., *Chronica de la Provincia de Syria y Tierra Santa de Gerusalem. Contiene los progressos que en ella ha hecho la religion Serafica, desde 1219 hasta 1632*, Madrid, 1684.
- ・ Lauda, P. (Zimolong, B. (Hrsg.)), *Navis peregrinorum*, Köln, 1938.

- ・ Montoya, A., *Chronica de la Cystodia de Syria y Tierra santa de Jerusalén, dedicada al Rey inmortal de los siglos y Señor de los señores, Christo. Escrita por... , Comissario de Tierra Santa a la Porta Othomana y Procurador General de Jerusalén y su Custodia. Parte Segunda, la qual incluie desde el año 1632 hasta el de mil y setecientos*, Arquivos Naciones Torre do Tombo, PT-TT-MSLIV/706, ANTT/7633.
- ・ Piccirillo, M. (a cura di), *Registrem Equitum SSmi Sepulchri D. N. J. C. (1561-1848), Manoscritto dell' Archivio Storico della Custodia di Terra Santa a Gerusalemme*, Jerusalem/Milano, 2006.
- ・ Puerto, J., *Patrimonio seraphico de Tierra Santa fundado por Christo, ... prometido, ... a N.P.S. Francisco,/// adguerido por el mismo Santo, heredado y posseido por sus Hijos de la Regular Observancia*, Madrid, 1724.
- ・ 大分県立先哲史料館編『大分県先哲叢書 ペトロ岐部カスイ 資料集』大分県教育委員会, 1995年。

二次文献

- ・ 浦川和三郎『東北キリシタン史』巖南堂, 1957年。
- ・ 辛島昇編『新版世界各国史 7 南アジア史』山川出版社, 2004年。
- ・ 五野井隆史『ペトロ岐部カスイ』教文館, 2008年。
- ・ 同『キリシタン信仰史の研究』吉川弘文堂, 2017年。
- ・ 櫻井康人「厄介者の聖地巡礼者—受入側史料から見た聖地巡礼史—」『科学研究費補助金基盤研究 (B) 報告書 中近世のキリスト教会と民衆宗教 (代表: 早稲田大学文学学術院教授・甚野尚志)』2010年, 102~109頁。
- ・ 同「14世紀~16世紀前半の聖地巡礼記に見る「聖墳墓の騎士」—儀礼へのフランチェスコ会の関与過程を中心に—」長谷部史彦(編著)『地中海世界の旅人—移動と記述の中近世史』慶應義塾大学出版会, 2014年, 185~215頁。
- ・ 同「日本人初のエルサレム巡礼者と東北のキリシタン」東北学院大学文学部歴史学科編『大学で学ぶ東北の歴史』吉川弘文館, 2020年, 78~79頁。
- ・ 立石博高編『新版世界各国史 16 スペイン・ポルトガル史』山川出版社, 2000年。
- ・ 永田雄三編『新版世界各国史 9 西アジア史 II イラン・トルコ』山川出版社, 2002年。
- ・ 松永伍一『ペトロ岐部—追放・潜入・殉教の道—』中公新書, 1984年。
- ・ 家島彦一『インド洋海域世界の歴史—一人の移動と交流のクロス・ロード』ちくま学術文庫, 2021年。
- ・ ルイス・デ・メディナ『イエズス会士とキリシタン布教』岩田書院, 2003年。